



CAST BY

人狼の排除と包括にまつわるポスター展

THE MOON

GalleryVener

本展開催に寄せて

2030年に人狼になる人が出てきて（一時期は家出症と扱われることもありました）から、既に15年経ちました。未だ、人が人狼になる原因は解明されていません。

人狼になった人は、多くの社会的排除を経験してきました。満月の光に照らされて、狼の姿に変身しても、内面は人間としての理性や知性は保ったままであることを、多くの非人狼に理解してもらうのは、とても困難なことでした。

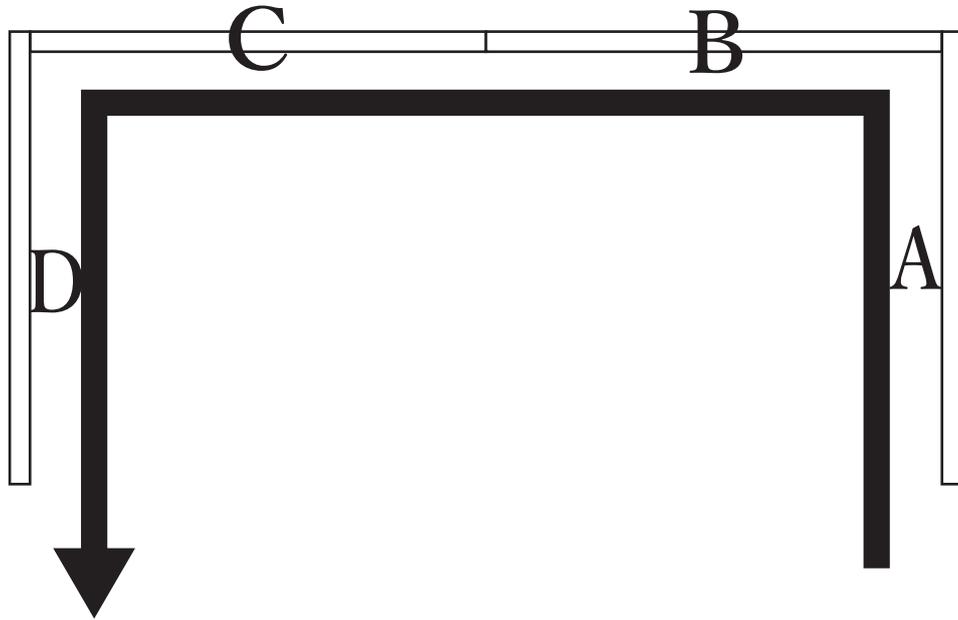
このため人狼は人間ではないという誹謗中傷や、チョコレートと玉ねぎが食べられなくなる不都合の改善、人狼を画一的なイメージに当てはめようとする悪意なき偏見など、人狼を取り巻く環境も多難なものでした。

『Moonlit Posters 人狼の排除と包摂にまつわるポスター展 -』を開催できたことは、人狼が体験してきた試練の過去を、現在に伝える場になること

ポスターというメディアを通じて、人狼という社会的マイノリティが経験する排除や、勝ち取った包括的な社会への希望について、鑑賞者の方に考えていただければ幸いです。

世界人狼福祉日本支部メディア広報部長
井伊琴衣優

鑑賞の順番のご案内



本展では

Aの壁面に、2030年代初期

Bの壁面に、2030年代中期

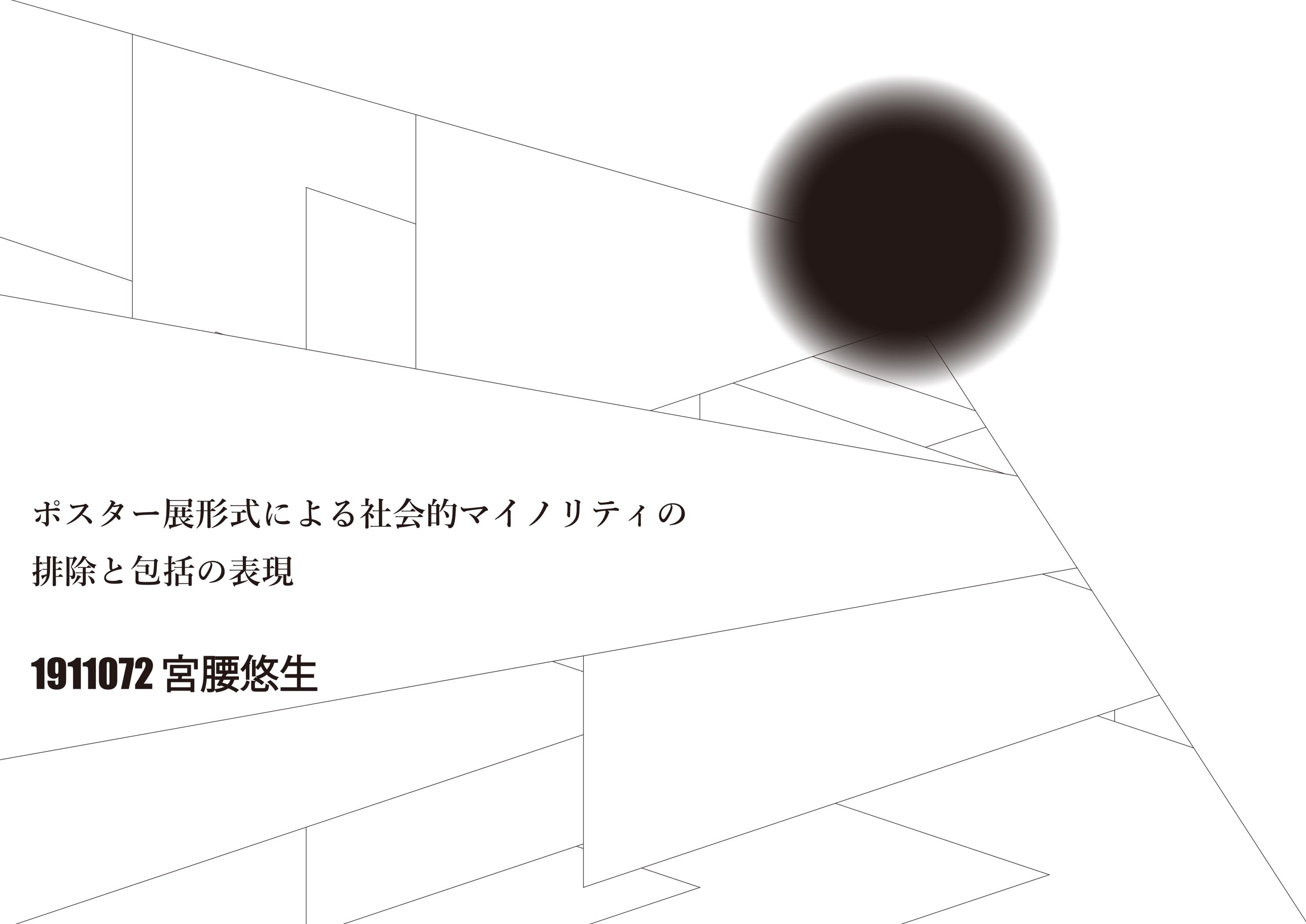
Cの壁面に、2030年代後期

Dの壁面に、2040年代

に制作されたポスターを中心に展示してあります。

A、B、C、Dの順に鑑賞していただくことで、人狼の社会における立ち位置の変遷がより理解しやすいと考えております。

また、キャプションや補足資料の新聞も同様の順番に展示してありますので、一緒にご鑑賞ください。



ポスター展形式による社会的マイノリティの
排除と包括の表現

1911072 宮腰悠生

背景

J.K. ローリングの小説『ハリー・ポッター』の魅力は、社会的マイノリティの排除と包摂に関する描写ではないかと考えた。

マグル（非魔法使い、非魔法使いの家系出身の魔法使い）、人狼、巨人、屋敷しもべ妖精などのような架空の存在が、現実社会における社会的マイノリティのように、作中の社会において差別や偏見の対象になっている。

被差別の主体を架空の存在に置き換えることで、読者が当事者ではないが故に、差別や偏見といった社会的マイノリティの問題点について、分かりやすく捉えられるようになっているのではないかと考えた。

本制作では、小説『ハリー・ポッター』におけるこの手法を、別のメディアのデザインに応用して、社会的マイノリティの諸問題について問題提起を行う作品を制作することはできないかを模索することにした。

社会的マイノリティとは

本制作における社会的マイノリティは、「単に人口の少数派ではなく、他のグループと比較して、社会に対する力が劣っており、それによって不利益を被っているグループ」と定義する。

『ハリー・ポッター』 の分析

制作にあたって、まずは『ハリー・ポッター』作中における社会的マイノリティである「マグル」、「人狼」を対象に分析を行った。

●マグル（非魔法使い、非魔法使いの家系出身の魔法使い）

マグルは、現実社会の人種差別や階級闘争を表象している。

マグル生まれの魔法使いは、純血主義者（伝統的に魔法使いしかいないとされている家系出身者のための社会を目指す魔法使い）から差別の対象にされ、学校内でのテロ行為の対象にされたり、「穢れた血」と蔑称で呼ばれたり、不当に逮捕されたりする描写がされている。

●人狼

人狼は、現実社会の病気や障害のメタファーであり、社会的障壁によって不利益を被る人を表象している。

例えば、人狼のキャラクターであるリーマス・ルーピンは優秀な魔法使いであるが、反人狼法の制度の障壁や、世間の根強い人狼への偏見という観念の障壁から、能力に見合った職に就けない。

このように、ハリー・ポッターは現実社会に差別と偏見を、架空の存在を用いてリアルに描写している。

ポスターとポスター展

『ハリー・ポッター』における手法を応用した制作のメディア形式として、ポスター展を選んだ。架空の社会的マイノリティが受ける差別や偏見を表現するにあたって、ポスター展が相応しいと考えた理由について、ポスターとポスター展のそれぞれ特性の観点から解説する。

●ポスター

ポスターは、その「ポスターデザインの内容」、「制作した人物や団体」、「制作の目的」などが、制作された時代や地域の社会の一部を反映していると言える。例えば、アメリカの戦争プロパガンダポスターを見ると、当時の世界大戦、戦争を賛美する政府、その政府が主導の広報機関の存在などの存在が浮かび上がる。

架空の被差別の主体が存在する社会を表現するのに、社会像の一部を反映するメディアであるポスターを制作することにした。

●ポスター展

ポスターは社会像の一部を反映するメディアであるが、反映できるものには限りがある。「制作に至った文脈」、「デザインに無い情報」、「ポスターを社会は、どう受け止めたか」などは、ポスターのみを鑑賞するだけでは、正確には理解することができない。

そこで、「複数のポスターによる社会の文脈の提示」、「キャプションによる作品の解説」、「資料による補足」で構成されるポスター展の形式にすることで、ポスターを補完し、架空の社会的マイノリティを表現することにした

社会的マイノリティと メディア

社会的に弱い立場にある人は、メディアにおいても差別の対象になる。メディアにおける社会的マイノリティへの差別には、例えば、以下のようなものがある。

●ヘイトスピーチ

特定の属性を攻撃したり、排除したりしようとする表現。インターネットにおける書き込みや、などあらゆるメディアで行われている。

●ステレオタイプの流布

ステレオタイプは、ある属性に対する思い込みや固定観念に基づいたイメージのことである。メディアはステレオタイプを広める側面があり、有害なステレオタイプは差別に繋がったり、人々の可能性を狭めたりする。

メディアにおける差別的表現の事例はこれ以外にも多くある。メディアにおける社会的マイノリティに関する表現において問題なのは、社会的マイノリティの当事者を傷つけたり、当事者以外の人に社会的マイノリティに対する差別意識を持つことを助長したりする表現があることである。

制作したポスター



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7



図 8

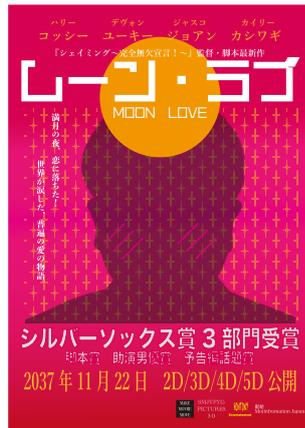


図 9



図 10



図 11

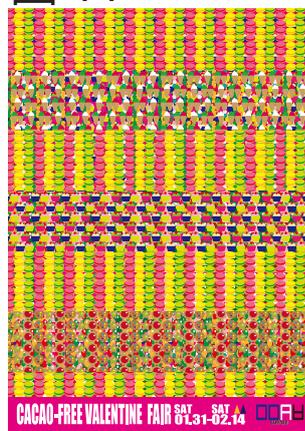


図 12



図 13



図 14

制作したポスターの設定

- 図1 2030年代初期 家出症に乗じてデマの情報を流布するポスター
- 図2 2030年代初期 家出症が治ると宣伝づる靈感商法のポスター
- 図3 2030年代初期 デマの流布のせいで価格が高騰した穀物酢のポスター
- 図4 2030年代初期 家出症が治ると宣伝づる擬似科学療法ポスター
- 図5 2030年代中期 災害弱者としての人狼の支援を促すポスター
- 図6 2030年代中期 人狼バッシングをする保守系雑誌のポスター
- 図7 2030年代中期 人狼差別主義団体のポスター
- 図8 2030年代後期 人狼が主人公の映画のポスター
- 図9 2030年代後期 図8の日本版ポスター
- 図10 2030年代後期 ジンロウっぽメイクを特集したメイク雑誌のポスター
- 図11 2030年代後期 不審者のイメージにデフォルメされた人狼を用いたポスター
- 図12 2040年代 人狼が食べられないチョコレートを使わないバレンタインイベントのポスター
- 図13 2040年代 人狼が代表を務める政党のポスター
- 図14 2040年代 人狼の社会活動イベントのポスター

「2030年代以降の日本」と「社会での人狼の立ち位置」の対応表

2030年代初期	人狼になる人が出てくる。社会において人狼は正しく認知されておらず、未知の奇病として扱われている。
2030年代中期	人狼の存在が広く認知される一方で、差別の対象となり、暴力行為や誹謗中傷が行われる。
2040年代後期	人狼に対する露骨な差別は、社会では無くなりつつある。一方で、人狼に対する悪意の無いものも含む偏見は、世間に広まっているままである。
2040年代	人狼に対する人権意識が高まり、活動や社会制度への変革が始まる。

架空のポスター展

MoonlitPosters

もし、架空の未来の日本に、社会的マイノリティとして人狼が存在したら、どんなポスターができるのか？という仮定で制作したポスター展である。ポスター展はポスター、キャプション、補足資料としての架空の新聞の切り抜きで構成される。

●ポスター

●キャプション

制作年、制作者、作品の概要と制作背景を記している。



『みんなでSTOP！左利き』

制作者 標準人間教行及び
適切な保健教育を考える会

制作年 2031年

このポスターは、一部の小学校教師が
学校に持ち込んだものである。

当時、左利きの小学生に対して、
「家出症が感染するから学校に来るな」
とハラスメントを行った事例もある。

●補足資料としての架空の新聞の切り抜き

ポスターが制作された時期には、どのような出来事があったのかや、どのような考え方があったのかを示す。

参考文献

- ・伊達桃子、2009、「ファンタジーの新しい波 - 『ハリー・ポッター』は何を持したのか -」、社会科学雑誌創刊号、pp.149-170
- ・太田耕軌、2006、「『ハリー・ポッター』に見る偏見と差別」、天理大学人権問題研究室紀要 第9号、pp.123-131
- ・二羽 泰子、2019、「社会的マイノリティとは何か」、UTokyo TV- 東大 TV、<https://today.tv/contents-list/2019FY/mini-lecture12/12-1>、最終アクセス 2022年12月9日
- ・Richard T. Schaefer、2011、「What is a Minority Group?」、Race, Racism and The Law、https://www.racism.org/index.php?option=com_content&view=article&id=280:minor0101&catid=15&Itemid=118、最終アクセス 2022年12月9日
- ・国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部、2021、「スティグマについて」、<https://www.ncnp.go.jp/nimh/chiiki/about/stigma.html#1>、最終アクセス 2022年12月9日
- ・坂田薫子、2014、「ハリー・ポッターのイギリス (1) — 『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における人種問題」、日本女子大学英米文学研究 49、pp.125-142
- ・坂田薫子、2015、「ハリー・ポッターのイギリス (2) — 『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における階級問題と政治」、日本女子大学英米文学研究 50、pp.71-89
- ・J.K ローリング、2016、「エッセイ集 hogwarts 勇気と苦難と危険な道楽」、Pottermore Publishing、第2章 リーマス・ルーピン
- ・Roslyn Weaver、2010、「Werewolf as Disability and Illness in 'Harry Potter' and 'Jatta' Papers: Explorations into Children's Literature, Vol. 20, No2, pp.69-82
- ・公益財団法人日本ケアフィット共育機構「障害の社会モデル (共生社会と心のバリアフリー)」https://www.carefit.org/social_model/、最終アクセス 2022年12月9日
- ・土田泰子、2005、「プロパガンダ・ポスターとイラストレーション：グラフィックデザインにおけるプロパガンダの手法と効果」、現代社会文化研 34、pp.1-18
- ・J.K. ローリング、松岡佑子訳、2000、「ハリー・ポッターと秘密の部屋」、静山社
- ・J.K. ローリング、松岡佑子訳、2008、「ハリー・ポッターと死の秘宝」(上下)、静山社
- ・
- ・内野 正幸、清水 英夫、1991、「差別的表現とマス・メディア」、新文学評論 40 巻、pp.324-325
- ・法務省、「ヘイトスピーチ許さない」、https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00108.html、最終アクセス 2022年12月9日
- ・福島県男女共生課、2014、『平成 21 年度版福島県男女共同参画高校生副読本からステレオタイプで決めつけていない?』のページです、<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/16005c/danjo-beyourself21.html>、最終アクセス 2022年12月9日
- ・手塚和佳奈、佐藤和紀、大久保紀一郎、久保田善彦、堀田龍也、谷塚光典、2021、「メディアや情報に対して大学生がもつステレオタイプやバイアスに関する実態調査の試み」、日本教育工学会研究報告集第3号、pp.9-16
- ・BBC NEWS JAPAN、2019、『「有害な」男女のステレオタイプ描く広告、イギリスで禁止』、<https://www.bbc.com/japanese/48659092>、最終アクセス 2022年12月9日
- ・坂田薫子、2015、「ハリー・ポッターのイギリス (3) — 『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会のジェンダー観」、日本女子大学英米文学研究 65、pp.71-89